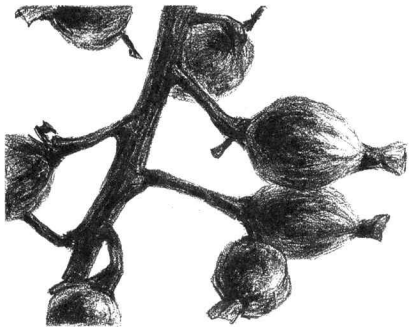


朝日

歌壇 俳壇



〈ゲットウⅢ〉 日高理恵子

佐佐木幸綱選

職業は介護従事者職場では全員マスク目力が要る
 (横浜) 桑田よし子
 ドットとは何であるかと父問へりIT知らぬ
 (加東) 藤原 明
 生もよきかな
 (豊後高田市) 榎本 孝
 この人は誰かと見ると瞳孔に吾が映りて首かしげる母
 (八尾市) 宮川 一樹
 油縄の苦難の歴史をジュネーブで世界に訴える
 (八尾市) 宮川 一樹
 福来旗に集魚灯で応え出漁す秋刀魚船団白浪たてて
 (気仙沼市) 及川 睦美
 切れのよき口笛のごと啼く声は川面を狙ふ番ひの鶯
 (下関市) 内田 恒生
 阪神が負け続けていた日々吾は子を授けた母をなくした
 (和泉市) 星田 美紀
 自転車の前と後ろに枯れ草を一回運んで朝が始まる
 (松阪市) 笹木 敏子
 堰あれば多摩川の水たためて中洲の石の白く定まる
 (多摩市) 豊間根則道
 子どもらと肉大食べし来々軒が継いでカフエらいらいに
 (東京都) 岡 純

【評】第一首、全員マスクの職場の毎日。結句「目力が要る」に納得。第二首、IT至上の時代によく言ったと思うこの歌の下句。第三首、たぶん施設に入っておられる母と面会した場面だろう。ていねいな細部にわたる描写が心に沁みる。

高野公彦選

十月の雨に学徒の出陣を見しや外苑の樹木危うし
 (中央市) 前田 良一
 人の手で掘られた間歩は銀山のタイムトンネル出れば蟬鳴く
 (出雲市) 塩田 直也
 水音のひびきはつかに秋めきて今朝の厨の蛇口光りぬ
 (福島市) 美原 凍子
 猛暑日を助けてくれたそうめんに別れを告げて作るボンゴレ
 (五所川原市) 戸沢大二郎
 スーパーで車を停める定位置が日陰になりて秋を感じる
 (埼玉) 永井 久恵
 ダムの底しづみし村のあたりよりささなみ生まる秋祭りごろ
 (神戸市) 松本 淳一
 昨日より空が高いと頷いて栗あんパン買ったこからが秋
 (相模原市) 石井 裕乃
 自転車を押しつつ眺む荒川の夕日はバンクがくれたごほうび
 (朝霞市) 岩部 博道
 ☆「カルピス」は内モンゴルがルーツとは知らずに飲んで初恋の味(茅ヶ崎市) 藤原 安美
 戦争をしたがる人は行かぬ人御霊に哀悼捧げるだけ
 (東京都) 塩田 泰之

【評】一首目、神宮外苑の樹木たちは学徒出陣を見守った筈。その樹木を伐採する計画に興を唱える作。二首目、間歩は人が掘った坑道。そのタイムトンネルを抜けると令和の蟬の声。三首目～七首目は、それぞれ味わいのある秋感受の歌。

永田和宏選

見せかけは気丈夫なれどあかんたれほんとのわたしを知ってたあなた(豊中市) 夏秋 淳子
 「してやる」の「やる」は要らない団塊の夫の優しき男の顔よ
 (横浜) 井上 優子
 わが妻は雑な男のささがきを雑ねと言てうまそうに食う
 (鎌倉市) 小椋 昭夫
 女性関係一人だに異議を唱えざり「女性ならではの感性」か、それ
 (水戸市) 中原千絵子
 本人にハラスメントの自覚なしハラスメントはそこが肝だ
 (富士市) 村松 敦規
 年ごとに急かされ惜しむ夏なりきつくつ法
 (浦安市) 菊竹佳代子
 暑すぎて蟬が鳴かない蚊もぬないどうなる人
 (東京都) 福島 隆史
 新世の生命誌は
 (東京都) 野田 充男
 人材か人手かで差がある時給高校生は人手なんだね
 (浦安市) 野田 充男
 目を開けることに集中しすぎて授業の内容思ひ出せない
 (東京都) 林 真悠子
 私がしたことにはまちがいありませんゴージャス置いて書店をでました
 (日立市) 加藤 宙

【評】夏秋さんの、ほんとの私を知ってくれていた夫、井上さんの、「やる」は不要だけれど団塊の優しさを持っている夫、小椋さんの、雑な男のささがきを喜んで食べてくれる妻、どれもいいカップルだ。四、五首目は是非、対にして読みたい。

馬場あき子選

寺を継ぎ僧となりたる教え子に知らず知らず敬語を使う
 (観音寺市) 篠原 俊則
 ☆「カルピス」は内モンゴルがルーツとは知らずに飲んで初恋の味(茅ヶ崎市) 藤原 安美
 遠目には森と見えしが近づけば馬洲神社の本クスナリ
 (八尾市) 水野 一也
 そち行くなこち来と呼ぶ母猫の威ある声かな飛び跳ねる仔らに
 (水戸市) 檜山佳子
 亡くなった作業員らにどれほどの補償のありや家族のありや
 (神戸市) 田崎 澄子
 足下ろす利那に雉子の抱卵と知りて跨ぎて心臓踊る
 (霧島市) 秋野 三歩
 銅鐺のねむりし丘を守るごとシラタマホシクサ地に降り敷きぬ
 (浜松市) 松井 恵
 馬鹿貝はときどきいるが馬蛤貝も浅瀬も失せし遠浅の浜
 (三浦市) 秦 孝浩
 十勝野の大地の恵みを積み走るジャガイモ列車タマネギ列車
 (北海道) 大戸 秀夫
 温暖化の海を嘆くかこの秋も身の細りゆく秋刀魚かなしも
 (仙台市) 沼沢 修

【評】第一首は僧職に対する無意識の敬意が生んだ敬語が微妙に面白い。第二首、初恋の味はモンゴルからだったか。第三首の禪の大樹の生命力。神社仏閣に巨樹が多いのはなぜだろう。第四首さすが母猫、猫語の力をみせる。

短歌時評 なにも見えねば

小島 なお

「言葉の魔術師」と呼ばれた塚本邦雄、《現代の巫女》と呼ばれた山中智恵子。その才を戦後歌壇に輝かせた両歌人の師であり、「現代短歌の発端」として比類のない作品世界を展開した前川佐美雄。代表歌集『植物祭』、『大和』を完本で収録した三枝昂之編『前川佐美雄歌集』(書肆侃侃房)が刊行された。

春がすみよよ濃くなる真昼のなにも見えねば大和と思へ 『大和』も春霞が濃く深く立ちこめる真昼時、見

渡すかぎり何も見えないのなら、そこは大和と思え。歌集『大和』刊行の昭和15年、文化思想団体の政治活動が全面禁止され、文学に戦時体制が敷かれた年であった。この歌を私は先行きの見えない時代の不穏な視界と解釈してきた。しかし編者の三枝はこう指摘する。「(時代への失意も踏まえつつ)〈見えねば〉こそ大和の本質」といった、歴史が濃厚に堆積した大和の国論と読みたい。時代の読みから自由になることで、短歌の

普遍的に手を伸ばす解釈である。第一歌集『植物祭』が刊行された昭和5年、歌誌「心の花」で当時の佐美雄は短歌の革新について「新しい角度から見る」たゞそれだけである」と明快に語っている。

そろそろと鳥けだものをひきつれて秋晴の街にあそび行きたし 『植物祭』戦争のたのしみはわれらの知らぬこと春のまひるを眠りつつける 新しい視界のめぐるめく 『植物祭』かな、なにも見えねば 『大和』へ。戦争を、日本を見ようとみひらく歌人の眼がある。(歌人)

柿本多映句集「ひめむかし」 蛇笏賞俳人の最新句集。「ひめむかしよもぎの話年移る」「庭より虫とびたつみちのくは」「地球(今)戦争火をかかへ鳥雲に」(深夜叢書社・3080円) 川名大著『昭和俳句史』副題は「前衛俳句～昭和の終焉」。昭和30年代の前衛俳句の勃興から、50年代からの俳句の大衆化・戦後世代の新風まで詳述。(角川書店・3520円)

風信

☆印は共選作。掲載作は記事への引用や、電子メディアやSNSへの掲載・収録をすることがあります。投稿は無地のほかき1枚に1作品、未発表の自作のみ。作品の横に住所、氏名、電話番号を明記。〒104・8661 朝日郵便局私書箱300、短歌は「朝日歌壇」、俳句は「朝日俳壇」へ。二重投稿は不可。選者が添削する場合があります。